

ことばで生活は切り開かれたか

- 学校設定科目「私達が立っている場所」10年の検証 -

大阪府立今宮高等学校 小山秀樹

今思えば「私達」の授業ほど、緊張して席に座っていた授業はなかったと思います。頭の中がモザイク状態で、いつも逃げたい気持ちがあったように思います。でも、たくさん悩んで、たくさん逃げたい気持ちになってこそその時間だと思うので、いっぱい頭の中でモザイクを描いてください。（卒業生からのメッセージ）

1. 「私達」の授業、開講す！

学校設定科目「私達が立っている場所」を始めて十年になる。総合学科三年生の現代文選択授業として平成十二年に開講した。私達の社会がどうなっているかを知り、その中を生き抜くことばを獲得する授業を願ってこの科目名となった。私はかねてから、ことばの学習が日常生活に生かされるような、また日常生活からことばの課題が発見され、学習として取り上げられるような、そんな授業をめざしてきた。「私達」の授業では、本校最高の思考水準で授業と日常をつなぐことをこころがけた。

2. 「私達」の授業、指導の実際

「学ぶこと、考えること、感じること」「私達とこの現代社会」「しくみの中をことばで生きる」「私達が立っている場所とつくっていく場所」など、年間を四つの単元で構成する。授業はまず、力のある教材を使って自分達の日常生活を見つめなおすところから始める。そして年間二回のグループ発表、討論会の開催、中学生や保護者向け体験授業の実施、大学教授など外部講師による授業など、授業を日常のことばとつなぐ展開へとつなげる。（京都教育大学植山俊宏教授には、この授業を見守り続けていただいた。）使用教材、学習段階とその実際を表にするとおおよ次のようになる。

段落	学習段階	学 習 の 実 際
1	力ある教材を使って日常を見つめ直す。（授業の側から現実へ向く意欲とことばの力をつける。）	<p>* 「『である』ことと『する』こと」（丸山真男）・・・ 日常の問題をことばにする絶好の教材である。授業は意見交換の機会をいつ、どのようにつくるかが重要である。話し合いで、人の意見に触れ自分の意見を相対化することは、問題を教材から離陸させ、現実の問題とさせる。</p> <p>* 「文学のふるさと」（坂口安吾）：生きている現実がやむをえない形をしていて、自分もまた例外ではないこと、そしてそのことが生きる勇気になることは高校生の現実へのエールとなる</p> <p>* 「パニック」（開高健）：個としての人間と集団のなかの人間、全体と部分など、矛盾のなかを生きるテーマは高校生を引きつける。「構造図」を作成させ、読みとる力も鍛える。</p>
2	教材による学習から発展的な現実の課題とつながった学習へ（授業の側から日常を見つめ	<p>* 「服装自主規制」問題、「下校時刻」問題の考察：アンケートなどの実施。小冊子の発行。授業主催の討論会の実施。</p> <p>* 「国語表現」「倫理」「現代社会」などの科目への学びの広がり・・・ 小論文を書くときの課題認識の方法と意見、社会科学系の科目へのリンクなど、「私達」の授業の学びを他の教科学習の学びと総合させる。</p> <p>* オープンスクールでの体験授業の実施：「私達」の学びを授業者として中学生・保護者へ 「『世界がもし100人の村だったら』を考察する。」</p>

	る)	「激突！プレゼンテーション大会決勝戦」「必勝！合格マニュアルづくり」
3	現実の課題意識を授業にのせる（日常の側から授業を構想する）	<ul style="list-style-type: none"> * 「生きるとは？」討論会：養護教諭も参加して実施した、少女売春をあつかった討論会。（立命館大学 馬路英和先生との連携） * さまざまなマニュアルづくり・・・「今高授業マニュアル」「水球部マネージャー完全マニュアル」など、日常の見つめなおし、確認、改善のためのマニュアルづくり * 本校教頭による授業・・・「ニーチェとの対話」「言葉に執して生きた人々」 * 外部講師による授業・・・「文学に遊ぶ、文学に学ぶ」 <ul style="list-style-type: none"> - 短歌をめぐって - （京都教育大学 植山俊宏教授） 「君たちはどう生きるか」（吉野源三郎）・・・作品の課題、日常生活の課題を総合しての文章づくり、討論会。

授業は段階を追うことをこころがけたが、ままならないことも多かった。日常の課題意識を授業に乗せることによって、学習者は学ぶ意味を再確認する。学習の姿勢をつくり、議論を深めるために、段階は必然的に行ったり来たりする。

発表の前日にグループの議論が沸騰し、当日資料を全面的に改訂する局面。帰った班員を班長が呼び戻した。下校時刻後、校門前でした立ったままの打ち合わせ。「私達」の授業の指導の特質は、それらの場面に寄り添い、助言を加えてひとつひとつをかけがえのない場面にある。

3. 「私達」の十年を検証

卒業後受講者は、日常生活をことばでしっかりつかんでいるだろうか。私は「私達」の授業を検証するため、十年間の受講者二四二名にアンケートを送った。（アンケート内容は今宮高校HPに掲載。）授業からの学び、仕事や現在の取り組みなどの記述から、ことばで生き抜こうとしているたくましい姿が感じられる。自由記述欄に受講者はこう書いている。

もやもやし続けた高校生活の中で、私にはまず、「考えること」や「気付く」ことが必要でした。「私達」には、そんな意味で、自分がありとあらゆるものに影響され、影響し、生きていることに気付くきっかけ、「自分は何もない」ことに気付くきっかけをいただいたと思っています。授業の中で、ただ投げられたものをキャッチするだけでなく、自らが投げるものの色や形を観察し、先生や仲間とキャッチボールをしながら学べたことでものごとには本質があることを 体験することができました。すべてがつながっています。（2005年卒業生）

グループを核として教室で学びあうことは、ものごとに向きあう姿勢とより高まった人間関係をつくる。

私は「自分で考え、言葉にする力」を学んだと思っています。私は高校卒業後、大学で美学美術史を学びましたが、卒業後は 営業事務、現在は建材メーカーの総務経理部で働いています。どんな仕事をしていても生きている限り「自分で考え、言葉にする力」は重要であると考えます。ただ毎日過ごしているだけでも悩みや考えること、迷う事は尽きないですが、そのような時に表面的な事柄にまどわされず、その時の自分に精一杯の答えを出せるよう、考える力の土台をこの授業で学んだように思っています。（2001年卒業生）

「私達」の授業が、ひとりひとりのことばの生活に少しでも資することができたならば、授業者としてこれ以上の喜びはない。授業の話し合いは、自分達のよりよい社会を目指したことばの鍛錬であった。そう言いきることのできる授業をつくり続けることによって私は、前の世代からあずかったことばの学びについての責任を果たしたいと思う。